

# リスク社会の存在論的不安と少年犯罪

## 佐賀バスジャック事件をもとにして

近藤 理恵\*

本稿では、2000年に佐賀バスジャックを起こした少年の例をもとに、近年の少年犯罪の特徴が、リスク社会において存在論的不安を抱え込んだ少年による犯罪にあることをA・ギデンズの存在論に依拠しながら明らかにする。その上で、存在論的不安がP・ブルデューが指摘しているような社会的排除のリスクとギデンズが指摘しているような親子関係における純粋関係のリスクや専門家システムの拡大による経験の隔離のリスクによってもたらされていることを明らかにする。その際に、近代人の病である存在論的不安が、消費社会の後に到来した1990年代以降のリスク社会において再びクローズアップされる、古くて新しい問題であることに着目する。また、これらのリスクが一部の集団や階級に降りかかるだけでなく、「普通の」子どもや「普通の」家族を個人的に、しかも輻輳しながら襲う点に着目する。

**キーワード：**リスク社会、存在論的不安、社会的排除のリスク、純粋関係のリスク、  
経験の隔離のリスク

### 目次

#### はじめに 問題意識

1. 佐賀バスジャック事件の全容
    - (1) 事件の全容
    - (2) 事件までの経緯
    - (3) 精神鑑定書と家裁の決定
  2. リスク社会の存在論的不安と少年犯罪
    - (1) 消えゆく存在への拘り
    - (2) 存在論的不安に苛まれる少年
    - (3) 身体の分離
  3. 存在論的不安への道程
    - (1) 社会的排除のリスク
    - (2) 純粋関係のリスク
    - (3) 経験の隔離のリスク
- おわりに

### はじめに 問題意識

本稿の目的は、近年の少年犯罪の特徴が、リスク社会において存在論的不安を抱え込んだ少年による犯罪にあることを明らかにした上で、存在論的不安が社会的排除のリスク、純粋関係のリスク、経験の隔離のリスクによってもたらされていることを明らかにすることにある。

少年犯罪、引きこもり、不登校、摂食障害、援助交際など、現代の子どもたちが抱える社会病理の背後には、「心の空虚さ」が潜んでいるといわれている。少年犯罪に限って言えば、佐々木嬉代三は、近年の現実離れした少年犯罪の背後には、無表情で、孤独な少年の心の空虚

\* 岡山県立大学保健福祉学部専任講師

さが潜んでいると指摘する<sup>1)</sup>。また、間庭充幸は、心の空虚さという表現はしないが、過激な攻撃性の背後に、他者に甘え、もう一度社会に包み込んでもらいたいと考える孤独な少年の姿を読みとる<sup>2)</sup>。さらに、清永賢二は、近年の非行を「心の中の巨大な空洞」によって引き起こされる衝動的な行動として考える<sup>3)</sup>。

本稿で着目したいことは、このように着目されてきた心の空虚さを、リスク社会の存在論的不安として読み解くことによって、現代の少年犯罪をより鮮明に理解することができるのではないかということである。

1980年代以降の高度近代社会において、M・ウェーバーのプロテスタンティズムの倫理やE・デュルケムの職業道徳に代表されるような、生産労働と有機的に結びついた価値観や倫理観が有効性を減じるなかで、消費社会が登場した。その後、1990年代以降、社会の複雑化に伴い、環境破壊や戦争の産業化、グローバリズム（アメリカ化）に基づく競争の激化と社会的排除の増大、専門化の進行と経験の隔離、伝統的権威の喪失と純粋関係の矛盾などのリスクが、予測不可能な形で個人を直撃する時代が到来した。「富の産出と分配」よりもむしろ、「差異的消費」と「リスク配分」に気を遣わなければならない時代が到来したのである。本稿では、リスク配分に気を遣わなければならない社会をA・ギデンズやU・ベックに倣ってリスク社会と呼びたいが、近代社会が行き着いた先の光の部分が消費社会であるとするならば、影の部分はリスク社会であるといえる。消費社会とリスク社会は高度近代社会のポジとネガの関係にあるのである。また、我々は、先に述べたようなリスクがたとえ従来の社会問題と同じ性質のものであったとしても、リスクが一部の

階級や集団にのみ降りかかるのではなく、誰を襲うかわからない点に、これまでの時代とは決定的に異なる特徴をリスク社会に見出す必要がある。リスクは、「普通の」子どもや「普通の」家族を個人的に、しかも輻輳しながら襲うのである。なぜなら、個人のライフスタイルが多様化している現代においては、同じ階級や集団に属していても、個人の選択のあり方によって、ある人間はリスクを背負い、他の人間はリスクを背負わないからである。

リスクに直撃された人間は存在論的不安に苛まれる。もちろん、キュルケゴールが信仰という飛躍によって絶望から抜け出そうとしたように、また、その約1世紀後にJ・P・サルトルが実存主義を唱えたように、存在論的不安はリスク社会に固有のものではなく、近代人の病である。とはいえ、高度経済成長期の大衆化のなかで我々のアイデンティティは拡散し、消費社会のなかでアイデンティティは見失われつつある。だからこそ、我々は、服装、化粧、美容、健康、レジャー、趣味、旅行、芸術、スポーツなどにおいて「私探し」を試みたのだが、そこで我々が求めたのは「小さな物語」を紡ぎ出すことにすぎなかったのではないだろうか。そして、努力しても報われず、失われるものの方が大きいリスク社会の到来によって、アイデンティティを見失いつつある我々は、存在論的不安と再び、しかも以前にも増して直接的に向き合わなければならないようになったのではなからうか。佐藤嘉一の『『わたくし語り』とドストエフスキー』<sup>4)</sup>に代表されるような物語論やギデンズの「自己モニタリング」概念が近年注目を浴びるのは、現在、リスク社会において再び抱え込んだ存在論的不安を取り除き、アイデンティティを再構築することが求められているからのよ

うに思えるのである。本稿で着目したい点は、存在論的不安が、リスク社会の文脈で再びクローズアップされるべき、古くて新しい問題であるという点なのである。

そこで、第1に、2000年に佐賀バスジャック事件を起こした17歳の少年の例をもとに、近年の少年犯罪が、リスク社会において存在論的不安を抱え込んだ少年による犯罪であることを、ギデンズの存在論に依拠しながら明らかにする。その上で、第2に、存在論的不安が、P・ブルデューが指摘するような社会的排除のリスク、ギデンズが指摘するような親子関係における純粹関係のリスクや専門家システム（「抽象システム」）の拡大による経験の隔離のリスクによってもたらされていることを明らかにする。

## 1. 佐賀バスジャック事件の全容

### （1）事件の概要

2000年5月3日の午後から4日早朝にかけて、佐賀 - 福岡行きの西鉄高速バスが、17歳の少年によって乗っ取られ、乗員・乗客22人のうち女性3人が刺され、1人が死亡、2人が重傷を負った。その後、広島県警の突入により、少年は現行犯逮捕された。

### （2）事件までの経緯

少年は、サラリーマンの父、母、そして妹からなる中流家庭で育った。中学2年生の時には、「きちんとやってくれそうだから」という理由から学級委員に選ばれたこともあるなど、少年は週刊誌が伝える異常性とはかけ離れた「普通の」真面目な優等生だった。しかし、少年は、基本的に人付き合いが苦手であり、中学3年の

夏から、カッターナイフで制服を切り裂かれたり、体にあざをつけられたりするなどのいじめを受けていた。高校入試の直前には、同級生から「筆箱を返して欲しかったら、ここから飛び降りろ」と言われ、踊り場から飛び下り腰椎を圧迫骨折し、別室で受験した。いじめを受けた頃から、少年は家庭内暴力を起こすようになった。ただ、それは両親にではなく、動物や妹に向けられるものだった。その後、少年は、成績低下のため目指していた県トップの高校に行けず、次のランクの高校に入学したが、9日間で不登校、引きこもりとなり、1年生の3月末に高校を退学した。

引きこもりになった少年は昼夜逆転した生活になり、親に何度も遠出のドライブを強要するようになった。一時ドライブも減るが、その頃から、少年は、インターネットで殺人などの残酷な場面を見たり、掲示板にのめり込んでいった。一方、両親の側は、引きこもりになった少年を何とかしようとして一生懸命だった。

事件を起こす2ヶ月前、少年は、内閣総理大臣、警察庁長官、文部大臣、日本放送協会会長に「我が革命を実行す」などと書いた犯行声明を送りつけた。同じ頃、母親は、少年の部屋から、もう一人の自分が殺人を勧め、中学校を襲撃するという手記と大量の刃物などを発見した。こうした事実で驚いた両親は、臨床心理士や精神科医の町澤静夫に相談の上、3月5日、警察のパトカーで少年を医療保護入院させた。しかし、少年は入院を拒み、「中学校に復讐するつもりだったのに、入院させられてそれができなくなった。おぼえている」と母親を罵り、入院2日後には、自ら県の病院担当者に電話で退院請求もしていた。少年は療養所でいい子を演じ、医者は、状態が良いという理由から、51

日ぶりの4月26日に少年を外泊させ、その後も、4月29日、5月3日と外泊させた。そして、事件は3回目の外泊のときに起こったのである。

犯行前日、少年は、自らの殺人計画と「人を殺す体験をしたかった」愛知県の少年の事件などを賞賛する7つの日記を書いていた<sup>5)</sup>。そして、犯行直前に、少年は、ネット上に「佐賀県佐賀市17歳、ヒヒヒヒ」という書き込みを残し、バスセンターに向かった。少年は、そこで数台のバスをやり過ごす、親の姿が見え、療養所に再び送られることを恐れ、犯行に踏み切った。犯行後の少年は、「バスを乗っ取っている時、『三国志』に登場する英雄、劉備になった気分だった」、あるいは事件によって「自己の存在感を確かめようとして死のうと考えた」と供述し、人を殺したことに何のためらいも示さなかった<sup>6)</sup>。

### （3）精神鑑定書と家裁の決定

精神鑑定書と家裁の決定について見てみよう<sup>7)</sup>。精神鑑定は、「事件当時、自己の行為の是非善悪を判断する能力に著しい低下は認められない」と、少年にほぼ完全な責任能力を認めた。少年は、統合失調症の症状である幻覚や妄想ではなく、心と体が自分から遊離したように感じる体験をして人格の統合が不完全な状態になる「解離性障害」であるとされた。また、反社会的な行為を繰り返す「行為障害」もあり、統合失調症の前駆的疑いもあることから、医師やカウンセラーによる観察と治療が必要だとし、医療少年院での処遇が望ましいとした。事件に至る経緯としては、少年は、「思春期危機」にあったとし、高校受験前の成績低下などに直面し「燃え尽き症候群」の状態になり、不登校、

引きこもり状態となるなかで「自我同一性拡散」の状態になった可能性も指摘した。また、インターネットによる反社会的価値観の影響も指摘した。そして、勉強で挫折し、将来の目標が崩れた少年は、「このままではホームレスになって自殺するしかない」「どうせ自殺するなら大きなことをしたい」と思い詰めるようになり、少年は「自己の存在感を確認するために事件を引き起こした」と結論づけた。また、自殺願望もあり、注意が必要だとも指摘した。

佐賀家裁が出した保護処分決定のうち、処遇に関する判断理由の要旨は次の通りである。

本件各非行は悪質残忍かつ重大であり、保護処分ではなく、検察官に送致し、公開の刑事裁判の過程を通して、少年にその行為の重大性、生命の尊さを認識、体得させ、責任をとらせるのが相当であるとするこも考えられる。

しかし少年はいじめを受けやすい性格や体格で、矯正施設での集団処遇にも慎重な配慮が必要である。また鑑定において指摘されているとおり、少なくとも解離性障害の治療が終わるまでは原則、個別処遇が必要であるうえ、少年が統合失調症を発病する危険性は無視できるほど低くないことから、ここ5年間ほどは常時、精神科医の目の届く環境が要請される。少年については、統合失調症が本格的に発病するか、あるいは現在の解離性障害が深刻化して多重人格障害を呈するか、あるいはこれらが混合した病像を呈するか予測が難しい。精神科医により統合失調症の兆候、あるいは予兆を把握し、予兆までもなくともその可能性が高いと認められれば、抗精神病薬を投与して予防する技法も考えられるが、その場合医療施設が適している。

今回、家裁調査官は、被害者調査を実施し、被害者から事情聴取の結果を少年に示したところ、多少の戸惑いの表情を見せたものの、現在に至るもそれ以上のことはなく、少年には被害者に対する悔悟の情はなく情性を欠如していると言わざるを得ないが、加齢による脳の成熟や矯正教育によ

る情性の獲得は期待できると思料する。

以上を総合すると、少年は、責任能力はあるものの、その解離性障害の治療が必要であり、治療と教育により少年に情性を獲得させ、被害者に対する悔悟の念を起こさせ、規範意識を育てるためにはむしろ検察官送致を選択せず、医療的矯正施設に収容するのが相当である。

また、犯行動機としては、「中学以降は、猛勉強によって存在感を印象づけようとしたが持続できなかった。将来に希望のないことを強く意識し、一時は自殺を考えたが、中学校襲撃でもして社会の注目を集め、自己顕示欲を満足させ、英雄になって死のうと考えた」点が指摘された。さらに、入院させられ、両親に対して憎しみが募ると同時に、愛知県の同世代の少年による殺人事件を知って、「先を越された」と感じ、事件を起こした点、また、インターネットを通じて得た残虐な場面によって反社会的な価値観が増幅された点も指摘された。

## 2. リスク社会の存在論的不安と少年犯罪

### (1) 消えゆく存在への拘り

近年の少年犯罪は、自らの存在にリアリティを感じることができない少年による自己の存在確認行為であると理解すべきなのではなかろうか。

逮捕直後に、人を殺したことに何のためらいもなく「新聞は？テレビは？」と自らの行為がどの程度メディアで報道されたかに関心を寄せたり、事件によって「目立ちたかった」、「自己の存在感を確かめようとして死のうと考えた」という少年の供述から、我々は、消えゆくような自らの存在を再び認めてほしいという少年の悲痛な叫び声を聞き取るべきなのではなかろうか。

少年がいかに自らの存在に拘っていたかは、事件以前の少年の言動からも明らかである。引きこもり後、家族以外の他者との唯一のコミュニケーションの場であったネット上でさえも、他者によって創作された少年の架空のプロフィールで「存在感無し」と書かれ、少年が母親に対し「ぼく、存在感ないって言われた」と落ち込んでいたこと、その後、少年がネット上に自ら書いたプロフィールで「存在感欲しい」と述べていたことから<sup>8)</sup>、少年がいかに消えゆくような自らの存在に拘っていたかが推測される。

さらに、バスジャック事件を犯した少年は、声明文に酒鬼薔薇聖斗のマークを書いたり、事件後、「酒鬼薔薇聖斗を救い出し、子どもの王国をつくる」と述べた。また、少年は、日記に、「人を殺す体験をしたかった」と主婦を殺害した少年に対し、年齢が同じこと、優等生であることに運命的なものを感じると記していた。少年が彼らに共感していたのは、彼らを感じていた消えゆく自らの存在であったのではなかろうか。なぜなら、少年が神戸の少年に共感した点は、神戸の少年が「『透明な存在』であり続けるボクを、せめてあなた達の空想の中でだけでも実在の人間として認めて頂きたいのである」と消えゆく自らの存在を社会に訴えかけようとした点であるように思えるからである。また、少年が「人を殺す体験がしたかった」愛知県の少年に共感した点は、精神鑑定書がその犯罪をカミュ、サルトル、ドストエフスキーによって考えられてきた人間の不条理による犯罪と位置づけたように、存在論的不安にあったように思えるからである。

### (2) 存在論的不安に苛まれる少年

本稿では、存在論的不安に由来する少年犯罪

を、ギデンズが呈示するリスク社会の存在論に依拠しながら検討したい。

ギデンズによれば、存在論的安心とは、「ほとんどの人が、自己のアイデンティティの連続性にたいして、また、行為を取り囲む社会的物質的環境の安定性にたいして確信をいう」<sup>9)</sup>。そして、存在論的安心とは、「認知的現象というよりも、むしろ感情的現象であり、無意識に根ざしている」<sup>10)</sup>。なぜなら、確固たる自己、あるいは外的世界の安定性を論理的に確証できる人などこの世に存在せず、日常的行為場面における不安感はその人の過度な感受性の結果であるといえるからである。

ギデンズは、存在論的安心を確保するための条件を以下の4つの側面から検討している<sup>11)</sup>。

第1の条件は、外的世界に対して存在論的現実の枠組みをつくることである。伝統という準拠点を喪失した近代人が存在論的安心を確保するためには、「現実を受け入れるだけでなく、日常生活の文脈における『行為』の統合的な側面としての存在論的準拠点を創造」<sup>12)</sup>しなければならない。彼はこのような外的世界に対する近代人の関わり方を世界内存在として捉える。

第2の条件は、生物学的死に対して、絶対的に不確かであり、本質的に理解できない、キュルケゴールのいう主観的死を乗り越えることにある。第1の条件が世界のなかでの自らの準拠点（居場所、空間）を確認する作業であるとするならば、第2の条件は、死という契機を媒介にして自己の存在を時間的に構想することであり、端的には、将来の希望という形で体験される。

第3の条件は、他者との間に信頼関係を築くことである。存在論的安心を得るためには、

E・エリクソンやD・W・ウィニコットがいうように、赤ん坊と介護者との間に「基本的信頼という投棄」が必要であり、異様な行動や引きこもりは、基本的信頼を得ることができない冷淡な環境に対処しようとする人間の努力であるとギデンズはいう。しかも、他者に対する信頼は、すべての人間において、絶えず繰り返して生ずる心理学的欲求である<sup>13)</sup>。このように、「他者の反応は、『守るべき、説明できる』世界の維持にとって不可欠であるが、しかし、絶対的に信頼しうる立場というものは存在しない」<sup>14)</sup>。他者との間で交わされる定型行為（日常実践）は我々に存在論的安心を与えるが、しかし、時として、通常と異なる他者の声、顔の表情、ジェスチャーが我々に洪水のような不安や苦悩をもたらすからである。彼はいう。「型にはまった行いは、心理的緊張を解放していくとはいえ、この点がある意味では重要なのであるが、誰もが決して緊張を解くことができる《相手》ではない」<sup>15)</sup>と。

第4の条件は、自己の伝記（物語）を再帰的に構成し、自己同一性を確保することである。ギデンズによれば、「自己同一性とは、個人の行為システムの連続性の結果として、単に与えられるものではなく、個人の再帰的な活動において、定型的に創造され、継続されるべき何かである」<sup>16)</sup>。換言すれば、「自己同一性とは、個人によって所有される差異的な特徴でもなく、特徴の集合でもない。それは、彼女あるいは彼の伝記の観点から、その人によって再帰的に理解されるような自己である」<sup>17)</sup>。

以上のように、存在論的安心を得るためには、少なくとも上記の4つの条件を満たす必要があるが、少年は4つの条件を満たすことができず、存在論的不安に陥ったようである。

第1に、少年は、外的世界に対して存在論的準拠点をもつことができなかつたようである。少年は、中学校3年時にいじめられ、その後、希望していた有名高校とは別の進学校に入学したものの、学校になじめず、不登校となり、高校を退学した。学校という場に存在論的準拠点をもつことができず、引きこもりになった少年は、インターネットの仮想的世界に居場所を見つけようとした。ネット上では、彼は「キャットキラー」や「ネオ麦茶」という名前に変身し、ネット上でのコミュニケーションを楽しもうとした。

しかし、その仮想的世界も、少年に存在論的準拠点を与えてはくれなかつた。たとえば、「馬鹿猫ひっこめ！消えろ！馬鹿猫逝ってよし！！クソ猫かかってこい！……」という少年の書き込みからもわかるように、少年は、いじめられっ子としての自分を返上するかのごとく、ネット上で強者を演じようとした。だが、彼の態度は、良好なコミュニケーションをとるにはあまりにも攻撃的で、相手を刺激するものであり、その攻撃性に対し多くの中傷が寄せられ、結局、彼は仮想的世界においても、存在論的準拠点を得ることはできなかつた<sup>18)</sup>。そのことは、インターネット上においても、「ぼく、存在感ないっていわれた」と母親につぶやいた少年の言葉からも推測できる。

第2に、少年は主観的死の状態にあつたといえよう。犯行の前日の日記で、少年は次のように述べていた。「6年3組の卒業写真で僕は立って睨み付けたようにしていただいでしょう。全てはあの時から初まって(原文)いる。これ以上、計画の遅延は許されない。本意ではないが……これで我人生を終わらせようと思う。それにしても許せない」と。また次のようにも語ってい

た。「このうらみけっしてわすれない このうらみけしてけっしてわすれない。だれにたいしていっているかわかるよな？僕の肉体は滅んでも精神だけは滅ばない このくつじょくぜったいにわすれない このよのすべてのせいめいたいがぼくのできだっ……」と。そして、その後、「ミンナシネ このうらみわすれない」と何度も繰り返した。「うらみ」という点に焦点を当てながら碓井真史が指摘しているように<sup>19)</sup>、少年は、学校でいじめられるだけでなく、インターネット上でもバカにされ、また、親にも見捨てられたという思いを募らせ、自らの運命を憎悪した「運命憎悪」(P・ブルデュー)の状態にあつたといえよう<sup>20)</sup>。

第3に、少年は他者と信頼関係を築くことが困難な状態にあつたようである。いじめられていた少年は、常に孤独であつた。また、彼は、両親との間においても良好なコミュニケーションをとれなかつた。「実際に事件を起こすつもりはなく、親を心配させて気を引くのが目的だった」あるいは「自分に向き合って欲しかった」という少年の供述から推測できるように、少年は親とのコミュニケーションを望んでいた。しかし、いじめられ、その後目指していた高校に行けなかつた少年は、家庭内暴力を起こすなど、両親に対して歪んだコミュニケーションしかとれなかつた。

第4に、少年は自己の物語を上手く形成することができなかつたようである。「中学以降は、猛勉強によって存在感を印象づけようとしたが持続できなかつた。将来に希望のないことを強く意識し、一時は自殺を考えたが、中学校襲撃でもして社会の注目を集め、自己顕示欲を満足させ、英雄になって死のうと考えた」という犯行動機にも示されているように、少年にとって、

猛勉強し、有名高校に入学することが、人生のすべてであった。しかし、目指す高校に進学できなかった少年は将来に対し全く希望を持てなくなった。「我々が誰であるかという感覚をもつためには、我々がどのように現在に至り、何処へ行こうとしているのかについての考えを持たねばならない」という、ギデンズが引用したチャールス・テイラーの言葉にしたがうならば<sup>21)</sup>、何処へ行こうとしているか分からなくなった少年は、自分が誰であるのかが分からなくなってしまったといえるのかもしれない。

### （3）身体の分離

存在論的不安に苛まれた人間の身体はどのようになるのであろうか。ギデンズによれば、「正常な外観」をもたらす定型化された身体の抑制（身体的マンネリズム）は、保護皮膜として人々に存在論的安心を与える。

しかしながら、「身体的な自己マネジメントは、非常に完璧で、持続していなければならないので、能力が崩れ、存在論的安心のフレームワークが脅かされる緊張の瞬間に、すべての個人はヴァルネラブルになる」<sup>22)</sup>。そして、一旦自らの置かれた状況に疑問を感じるようになると、これまでの定型行為は当該の人にとって正しくなくなる。それでもなお、定型行為を継続しようとするならば、人は「虚偽のパフォーマンス」を演じ、「偽りのペルソナ」を表現しなければならない。存在論的不安に着目するR・D・レインの「にせ自己」概念を借りていうならば、こうした状態は、身体から遊離した真の自己が、「にせ自己」(R・D・レイン)としての身体を、氣遣ったり、おもしろがったり、ときには憎んだりしながら眺めたりしている状態であるともいえる<sup>23)</sup>。

ギデンズは、レインの「にせ自己」概念に依拠しながら、自己と身体が分離した状態を「身体の分離 (disembodiment)」と呼んだ上で、身体の分離が進行すると人は統合失調症となるが、軽い身体の分離は日常生活の緊張状態においてすべての人によって経験されるという。彼はいう。「軽い形の身体の分離は、日常生活の緊張状況において、すべての人々によって経験される存在論的安心の混乱に顕著な特性である」<sup>24)</sup>と。軽い身体の分離とは、たとえば、学校や会社に行かなければならないのに体が動かないなど、自らの身体が自らのものとして感じられない感覚を意味する。

ここで重要なことは、身体の分離は危険に対する一時的な反応であり、身体の分離は、危険を被った人々に対し、危険を越え、安全さえもたらすという点であろう。入院前日の手記で「もう一人別のが出てきた。そいつは僕に恐ろしいことを勧める。人を殺せ、人を殺せ、誰か僕を止めて下さい。もう止まらない、もう止まらない」と書き、「解離性障害」と診断された少年の場合にも、身体が分離した状態にあったといえよう。

### 3. 存在論的不安への道程

ギデンズによれば、高度近代社会に生きる我々は統合的なアイデンティティを保持することが困難であり、自己のジレンマと様々な社会病理を抱えることになる。そして、自己のジレンマや社会病理に通底している感覚は存在論的不安、あるいは「人格の無意味性 (personal meaninglessness)」の感覚であるとギデンズはいう<sup>25)</sup>。このことに関して、宮本孝二は「自己の意味づけが一貫性と統合性を失い、断片化

され、多様な問題に対処する際に自己の無能感を味わい、自己の意味づけの確固たる根拠を失い、不確実性に苦しみ、商品化の圧倒的な影響力で自己の個性的な意味づけを見失う人々は、自己の無意味さという脅威にさらされる」<sup>26)</sup>とまとめている。現代の子どもたちの社会病理の多くは、ギデンズが指摘するような存在論的不安あるいは人格の無意味性に根ざしているといえるのではなからうか。そして、その存在論的不安は、殺人のように他者に向けられる場合と、自己の身体を傷つける援助交際や摂食障害、あるいは自殺のように自己に向けられる場合があるのではなからうか。

少年の場合には、社会的排除のリスク、純粋関係のリスク、経験の隔離のリスクによって自らの存在が消えそうになり、その存在論的不安が殺人という形で他者に向けられたように思われるのである<sup>27)</sup>。

### （1）社会的排除のリスク

日本の経済の「場（champ）」においては、国際的な競争社会を背景にリストラが行われると同時に、年功序列、終身雇用制度が揺らぎ、誰が、いつ、どのような形で失業し、不安定就労に就かざるを得ないかもしれない状況がある。教育の場においても、学歴や受験に関する競争システムの深化と消費社会化や情報社会化に伴う若者文化の変質等によって、人間の成長をいびつなものにする力が働いているし、家族の場においても「生活世界の植民地化」（J・ハパーマス）が進行し、家族という基本的な生活の場における人間関係すら変質しつつある。このように、社会的排除のリスクとは、社会空間の中の相対的に自律した多数の場、その下位の場、そしてその下位のミクロコスモスに散り

ばめられた大小の社会的排除が、誰を、いつ、どのように直撃するかもわからない状況を意味する。また、ブルデュー理論にしたがえば、それは、他者の負のレッテル貼りによって生じると同時に、身体的にはハビトゥスの分裂と、感情的には運命憎悪を伴う<sup>28)</sup>。

少年は、社会的排除のリスクに直撃されたりリスク社会の犠牲者だったのではなからうか。少年が入学した高校の校長は、入学式の時に『灰色の青春』という言葉があるが、君たちの青春は灰色ではない。真っ黒だと思え」と述べたり、その高校の多くの教師は勉強ができない生徒に対し「駄目なやつだ」と見たり、「おまえは人間のクズだ」と罵倒していた<sup>29)</sup>。中学校でいじめを受け、志望高校に行けなかったことに加え、大学進学だけが目指される高校に入学した少年の場合、まさに教育の場において社会的排除のリスクに直撃されたといえるのではなからうか。このことは、少年が小学校6年生の時から学校に対する恨みをもち、中学校襲撃を計画していたこと、また、少年によって顔面と両手を斬りつけられたにも関わらず、「乗っ取りを宣言した少年の顔を見たときの第1印象が、いまでも忘れられません。『あの子は不登校児だ』と直感したんです。切ない感じ、居場所がない感じ、やり場がない感じ、とんがった感じといえますか……言葉にできないような微妙な感覚です。私も学生時代不登校になった時期があり、私の子どもも一時学校に行けなくなっていました。少年からは『同じ匂い』がしたんです<sup>30)</sup>』という被害者の証言からも理解できよう。また、「このままでは将来ホームレスになって死ぬかもしれない」と将来を絶望していた少年の場合、教育システムからの排除だけでなく、社会的排除が蔓延するリスク社会全体を

敏感に感じていたように思えてならない。

## （2）純粋関係のリスク

リスク社会においては、教育システムから排除された子どもを家族が保護膜として優しく受けとめようとしても、多くの場合、受けとめることができないという現実から我々は話を進めるべきなのではなからうか。家族が保護膜として機能しない理由は様々考えられるが、少年の場合には、純粋関係のリスクにその要因があると思われる。

「純粋な関係性とは、社会関係を結ぶというそれだけの目的のために、つまり、互いに相手と結びつきを保つことから得られるもののために社会関係を結び、さらに互いに相手との結びつきを続けたいと思う十分な満足感を互いの関係が生み出していると思えず限りにおいて関係を続けていく、そうした状況を指している」<sup>31)</sup>。

恋人、夫婦、あるいは友情関係などの親密関係は純粋関係として成立するが、親密な関係性のひとつである親子関係は完全には純粋な関係になりえない。なぜなら、佐々木嬉代三が指摘するように、「子どもにとって家族とは、かつてと同様に今日でも、運命的に与えられしもの」であり、「父と母を選べないのはもちろんのこと、家族を取り巻く社会的状況と家族の置かれた社会的位置をそのままに受けとめて成長して行かざるを得ない運命を、子どもは担っている」<sup>32)</sup>からである。運命的なものとしての家族は、子どもにとっての保護膜にも、惨状にもなり得る。たとえば、後者の例として、2002年に倉敷市で起こった母子家庭の子ども（11歳）の餓死事件を挙げることができる。少女は、学校に通わせてもらえず、夜中まで風俗店の受付をする母の帰りを、布団が敷いてある風俗店の

寮の汚れた部屋で、コンビニのおにぎりやスナックを食べながら、ひとりで待つ生活を送っていた。その後、母が客の男と一緒に少女を連れて店を出て行ったときも、母がその男と別れ、公園で出会った老爺の家に転がり込んだときも、そして、老爺が病院に緊急入院してから所持金がなくなり、母子共に蜂蜜をなめて過ごしたときも、少女は母の言いつけ通り、外部に助けを求めることもなく餓死した。この少女のことを思うと、運命としての親子関係の重たさを感じずにはおられない<sup>33)</sup>。

とはいえ、ギデンズが「親は年少の子どもに比べはるかに大きな力をもっているだけでなく、親のとする態度や行動は、子どものパーソナリティや性向を形づくってもある。しかしながら、子ども時代が純粋な関係性の世界の影響をまったく受けずにいると考えるのは、確かに誤りである」<sup>34)</sup>と述べているように、また、「親の権威的態度によって代わるものとして、親密な関係性に重点が置かれていくとともに、まさに関係性の質こそが前面に現れてきているのである。親と子の双方の側に、相手に対する神経の細やかさと思いやりが求められているのである」<sup>35)</sup>と述べているように、親の権威に子が従うというよりはむしろ、親子の情愛に基づく近代家族は、運命的な要素だけでなく、純粋関係の要素を多分に含んでいる。

ここで重要なことは、ギデンズが指摘するように、人は存在論的不安を解消させるために他者との相互信頼を発展させ、心理的な安定をもたらす純粋関係を希求するが、純粋関係を希求すればするほど、逆に存在論的不安が増幅するという点である。つまり、純粋関係は存在論的不安の解消にとって両刃の剣でしかなく、「純粋な関係と、それが内包される親密性との連結

は、自己の統合性に対して法外な重荷を創出する」<sup>36)</sup>のである。なぜなら、純粋関係は他者の「真正性」を介して成立するのだが、市民道徳（近代的な倫理）が衰退、崩壊したにも関わらず<sup>37)</sup>、他者に真正性を求める我々は、必ずしも他者の真正性を得ることができず、ヴァルネラブルにならざるを得ないからである。本稿ではこのような状態を純粋関係のリスクとして捉えたい。

いじめを受けていた少年の場合、友人という純粋関係は存在論的不安を解消するものではなかった。また、家族という純粋関係も少年の存在論的不安を解消しえなかった。少年の親子関係が親と子の双方が互いを思いやる純粋関係を有していたことは様々な例から明らかである。少年が両親にとって待望の子であったこと。両親は少年を可愛がり、少年が中学生になるまで、母親は少年のことを思い短時間のパート以外は主婦業に専念していたこと。父親は体の小さな少年がいじめにあわないように、少年を空手道場に行かせたり、帰りが遅いため親子交換日記をしていたこと。少年の側も、小学校のときには父の誕生日に「肩たたき券」や「お手伝い券」をプレゼントしたり、母の誕生日にはタンポポの花を摘んだりしていたこと<sup>38)</sup>。そして何よりも、少年が親とドライブした際の高速道路の大量の領収書を乗っ取ったバスに持ち込み、その領収書を宝物であると人質に示していたことから、少年がいかに親との間に純粋な関係を求めていたかが推測される。

しかし、ギデンズが純粋関係においては憤怒、憤激の感情が渦巻くと述べていたように、少年の場合にも、社会的排除のリスクに襲われたことをきっかけに、家庭内暴力の泥沼のなかに足を踏み入れてしまった。少年の場合、血統書付

きの犬や高価なパソコン、夜中の長距離ドライブなどを要求する形でしか親に真正性を求めることができず、親の側はローンをしてまでパソコンを買い与えたり、疲れた体でドライブにつき合うなど、懸命に少年の要求に応えようとした。しかし、ギデンズも指摘していたように、少年が要求する真正性に完全に応えることのできる親などこの世に存在せず、親と子の純粋関係は少年の存在論的不安を解消するどころか、むしろ、子の純粋関係への希求が家族病理を生み出したといえるのではなからうか。

少年の事件から明らかなことは、親が教育システムから排除された子どもを保護膜として支えようとしても、また、子どもの側も傷ついた自らを守ってもらおうと保護膜としての家族を希求したとしても、子どもの希求する真正性に完全に応えられる親はこの世に存在しないということである。つまり、純粋関係的な要素を多分に含んでいる今日の家族は、教育システムから排除された子どもを保護膜として優しく包み込もうとしても、純粋関係のリスクによって、そもそもそうすることが困難な状態に置かれているのである。

### （３）経験の隔離のリスク

教育システムから排除され、家族の手にも負えなくなった子どもを抱える親が最後に頼るのは、「心の病」の専門家であるカウンセラーや精神科医であろう。少年の親も引きこもりになった少年をなんとかしようとする様々な相談機関に相談に行った。また、殺人をほのめかした手記や隠し持っていた凶器を発見した際には、少年を医療保護入院させた。ギデンズは、狂気、犯罪、疾病、死亡、性行動、自然などの現象を日常生活から切り離し、隠蔽することを「経験の

隔離」というが、少年の両親も養育上の経験の隔離によって、家族の存在論的安心を確保しようと思ったのであろう。しかし、ここで着目したいことは、存在論的不安を解消するために近代に創出された経験の隔離は存在論的不安を解消しないという、経験の隔離の矛盾である。

精神病院、刑務所、病院で直接的、組織的に行われる経験の隔離は、「道徳的ジレンマ」を引き起こしている存在に関わる問題を社会生活から排除することによって、存在論的安心を確保するために創出された近代の産物である。ギデンズが呈示している狂気と犯罪に限って見てみよう。犯罪を人間の生まれながらの悪行であり、悪魔の証であると考えたり、狂気を神の意志の結果であると考えていた時代が過ぎ去り、犯罪も精神障害も、特定の環境下においては誰にでも起こりうるものであり、すべての人々が本質的に矯正することが可能であると信じられるようになると、犯罪者や精神障害者を隔離する傾向が強まった。刑務所では、規律と統制を通じた道徳教育が行われた。また、精神障害者を収容する施設では、アサイラムという環境を通じて精神的な健康を回復することが目指された。問題のある人格の改善という道徳的目標は、規則正しい日常生活の徹底と同様に、厳重な監視によって達成された<sup>39)</sup>。

ギデンズによれば、刑務所やアサイラムとは「拡大されたモダニティのフレームワーク」である。刑務所生活とは、近代の社会環境において確立された日課の模倣なのであり、アサイラムとは、不治の精神症状にあるマイノリティーに対しても、再帰的なセルフコントロールを開発しようとする実践の場なのである。そして、近年、これらの施設では、治癒よりも、再帰的セルフコントロールや単なる監禁が重要性を増

している。このように、矯正することが難しい「行動異常」のマイノリティーを収容することにより外界の人々を保護する経験の隔離は、人々の存在論的不安を解消させるはずであった<sup>40)</sup>。

しかしながら、経験の隔離は、人々の存在論的不安を解消しえなかった。たしかに、「経験の隔離は存在論的安心を脅かす多くの形態の不安感を抑え込むのに役立つのだが、しかし、かなりの多くの犠牲を伴う<sup>41)</sup>」からである。つまり、専門家システム（「抽象システム」）の支配に基づく経験の隔離が、犯罪及び精神障害の問題、換言するならば、道徳や存在に関わる問題を完全に抑圧し、我々は新たな「道徳的不安定」を抱え込むことになるからである。「経験の隔離は生活環境に対するもっともらしい制御力を生み出すが、しかしながら、絶え間ない心理的葛藤と結びつきがちである。実存的問題がすべての人々の生活の根本にかかわり、制度的抑制は決して完全ではありえない<sup>42)</sup>」のである。本稿では、このように矛盾をはらんだ経験の隔離を、経験の隔離のリスクと呼びたい。

「精神病院に入院させた両親に復讐したかった」、「親は自分に相談せず、医者らだけに相談した」、あるいは「自分に向き合ってほしかった」という犯行後の少年の供述から明らかなのは、養育上の経験の隔離のリスクが少年と両親を襲い、彼らの存在論的不安を解消しなかったということである。つまり、「隔離された経験のフロンティアは、分裂状態にあり、緊張と統制されない権力で満ちている<sup>43)</sup>」ということであろう。

## おわりに

神戸で小学生殺害事件を犯した少年が「これからも『透明な存在』であり続けるボクを、せめてあなた達の空想の中でだけでも実在の人間として認めて頂きたいのである」と訴えたように、また、佐賀バスジャック事件を犯した少年が事件によって「自己の存在感を確かめようとして死のうと考えた」と述べたように、今日の少年犯罪は、自己の存在にリアリティを感じ得ない、存在論的不安あるいは人格の無意味性の感覚に根ざしているといえよう。

ギデنزの存在論にしたがえば、存在論的不安の状態とは、外的世界に対して存在論的現実の枠組みをもてない状態、主観的死の状態、他者との間に信頼関係が得られない状態、自己の伝記（物語）を再帰的に構築できない状態である。そして、こうした状態にある我々の身体は、分離していくのである。

本稿では少年の存在論的不安について検討してきたが、少年の存在論的不安は少年が消費社会の後に到来したリスク社会において社会的排除のリスク、純粋関係のリスク、経験の隔離のリスクに襲撃された結果であり、少年の事件はリスク社会の存在論的不安を象徴するものであるといえよう。

ここで着目すべきは、社会的排除のリスクに陥ったのは底辺層の子どもではなく中流家庭の優等生であり、純粋関係のリスクに直撃されたのは純粋関係を希求する現代の「普通の」家族であり、経験の隔離のリスクに直撃されたのは専門家に頼る「普通の」親だったということである。つまり、この事件は、リスク社会のリスクが一部の階級や集団に襲いかかるだけでなく、ある個人や家族を直接襲うことを物語って

いるのである。矢幡洋は、この事件の原因を、少年の両親が専門家にばかりに頼り、少年と向き合っていなかったことに求める<sup>44)</sup>。たしかに少年を医療保護入院させたことには問題があったのかもしれない。しかし、ここで問題にすべきは、少年の親が少年と向き合わなかったのではなく、むしろ向き合おうとしても向き合うことが困難な純粋関係のリスクであるように思える。また、経験の隔離に着目するだけでなく、家族の手に負えなくなった子どもをもつ大半の親は心の専門家に頼らざるをえないという経験の隔離のリスクに着目すべきであろう。

もうひとつ着目したいことは、教育の場における社会的排除のリスクに直撃された少年は、その後、純粋関係のリスク、経験の隔離のリスクと輻輳するリスクに直撃されたということである。一度リスクに襲われた人間はその後輻輳するリスクに襲われるというのが、リスク社会の特徴であり、少年もその例外ではなかったのである。

本稿に残された課題は多々あるが、倉敷市の母子家庭の子どもの餓死事件をもとにして、社会的排除のリスク、運命的なものであると同時に純粋関係的である家族のリスク、及び経験の隔離のリスクについてより詳細な検討をしたい。

## 注：

- 1) 佐々木嬉代三『社会病理と社会的現実』学文社、1998年、223頁及び243頁。
- 2) 間庭充幸『若者犯罪の社会文化史』有斐閣、1997年、243-247頁。
- 3) 清永賢二「現代少年非行の世界」、清永賢二編『少年非行の世界』有斐閣選書、1999年、1-30頁。
- 4) 佐藤嘉一『わたくし語り』とドストエフスキ

- 一）『立命館人間科学研究』第4号，立命館大学人間科学研究所，2002年11月，49-76頁を参照された。
- 5） No.1の日記は，殺人の計画は11歳の時からはじまっていて，この計画を遅らせることはできず，本意ではないが我人生を終わらせようという内容からなっている。No.2は，内閣総理大臣等に送った4通の手紙はいたずらではないという内容である。No.3では，「6年近い歳月をかけて練った計画はこんなものではなく，実行できないとは残念だ」とした上で，「このうらみけしてけっしてわすれない」と何度も繰り返している。No.4は，「貴様らに楽しい連休などさせるものか」と連休を楽しむ者を恨む内容からなっている。No.5は，「てるくはのる」と名乗り小学2年生男子を殺害した京都の事件や，ストーカー行為の果てに女子大生を殺害した沼津の事件，バスジャック事件の前日の5月2日，「人を殺す体験がしたかった」として主婦を殺害した愛知県の事件に共感した内容となっている。とくに愛知県の事件に関しては，年齢が同じこと，優等生であることに運命的なものを感じている。No.6では，愛知県の少年を「君は偉大な少年だ」と讃える一方で，「未来のある若い人はやめようと思った」というその少年の考えに対し，「甘いな」と酷評した後，少年犯罪を煽っている。No.7では，「ネオ麦茶。すべて殺す。END。」と日記を締めくくっている（この部分の記述に関しては町澤静夫『佐賀バスジャック事件の警告』マガジンハウス，2000年，116-125頁を参照した）。
- 6） この部分の記述並びに以下の分析においては，2000年5月5日～2000年10月2日までの『朝日新聞』の他，本稿の注で示した佐賀バスジャック事件に関する複数の著書を参照した。
- 7） 精神鑑定書に関しては，碓井真史『なぜ「少年」は犯罪に走ったのか』ワニのNew新書，2000年，91-93頁に依拠した。少年の処遇に関する判断理由の要旨に関しては，『朝日新聞』夕刊（東京）2000年9月29日を引用した。犯行動機に関しては，碓井真史，同上書，117-119頁を参照した。
- 8） 他者によって創作された履歴は以下の通りである。
- 「名前 ゴミカス，年齢 30歳，職業 無職，学歴 高卒，資格・免許 無し，趣味 無し，特技 無し，身長 165センチ，体重 65kg，容姿（顔）30点，友人 無し（いない歴30年），恋人 無し（いない歴30年），前科 無し（万引きで補導歴有り），財産 無し（親の土地約1億円分を相続する予定），存在感 なし」（藤井誠二『17歳の殺人者』朝日文庫，2002年，297-298頁）
- それに対し，自らが書いた履歴は以下の通りである。
- 「名前 ネオ麦茶，年齢 16歳，職業 登校拒否，学歴 今のところ高卒，資格・免許 無し，趣味 無し，特技 無し，身長 178センチ，体重 65kg，容姿（顔）70点，友人 無し（いない歴2年），恋人（いない歴16年），前科 無し，財産 無し（親の土地約10億円分を相続する予定），存在感 欲しい」（同上書，300-301頁）
- 9） Giddens, A., *The Consequences of Modernity*, Polity, 1990, p.92. (訳) 松尾精文，小幡正敏共訳『近代とはいかなる時代か？』而立書房，1993年，116-117頁。
- 10) *Ibid.*, 1990., p.92. (訳) 同上書，117頁。
- 11) 4つの条件に関しては，Giddens, A., *Modernity and Self-Identity*, Stanford, 1991, Chapter 2, 及びGiddens, *op.cit.*, 1990. (訳) 前掲書，1993年を参照した。
- 12) *Ibid.*, 1991, p. 48.
- 13) この点に関しては，Giddens, *op.cit.*, 1990, pp.97-98. (訳) 同上書，124頁を参照した。
- 14) Giddens, *op.cit.*, 1991, p.52.
- 15) Giddens, *op.cit.*, 1990, p.98. (訳) 前掲書，124頁。
- 16) Giddens, *op.cit.*, 1991, p.52.
- 17) Giddens, *ibid.*, p.53.
- 18) 少年は，ネット上で悪態をつくだけで，そもそもネット上に存在論的準拠点を求めているのではないかという意見があるかもしれない。しかし，少年が自らの履歴をかなり正確に明かしていることから，彼はネット上に存在論的準拠点を求めているといえるのではなからうか。

- 19) 碓井真史, 前掲書, 73-80頁。
- 20) 運命憎悪に関しては, 拙稿「ブルデュー理論における運命愛と運命憎悪」『社会学史研究』第20号, 日本社会学史学会, 131-143頁を参照されたい。
- 21) Giddens, *op.cit.*, 1991, p.54.
- 22) Giddens, *ibid.*, p.57.
- 23) この点に関しては, Laing, R. D., *The Divided Self*, Tavistock, 1960, p.71. (訳) 阪本健二, 志貴春彦, 笠原嘉共訳『ひき裂かれた自己』みすず書房, 1971年, 88頁を参照した。
- 24) Giddens, *op.cit.*, 1991, p.59.
- 25) この点に関しては, Giddens, *ibid.*, pp.187-188を参照した。存在論的不安と少年犯罪(社会病理)について指摘したものとしては, 町澤静夫, 前掲書や影山任佐『自己を失った少年たち』講談社, 2001年, あるいは坂井敏郎「社会病理の現象学的解明」『現代の社会病理学』, 日本社会病理学会, 1993年, 101-139頁などがある。
- 26) 宮本孝二『ギデンズの社会理論』八千代出版, 1998年, 115頁。
- 27) 存在論的不安を解消してくれると信じられた「純粋関係」や「経験の隔離」といった近代の産物は存在論的不安を解消してくれるどころか我々に存在論的不安をもたらす。つまり, 様々な出会いや環境が統一化と断片化という自己のジレンマをもたらし, その結果, 厳格な伝統主義と権威主義的同調の病理が引き起こされる。また, 社会的排除が占有と無力性という自己のジレンマをもたらし, その結果, 飲み込みと全能性の病理が引き起こされる。さらに, 伝統的権威の喪失が権威と不確実性という自己のジレンマをもたらし, その結果, パラノイアと無気力症の病理が引き起こされる。商品化が個性化された経験と商品化された経験という自己のジレンマをもたらし, その結果, ナルシズムと過度の個性化の病理が引き起こされる。ギデンズが自己のジレンマと社会病理を引き起こす社会的背景として想定している, 純粋関係, 経験の隔離, 様々な出会いや環境, 社会的排除, 伝統的権威の喪失, 商品化は, 彼自身明確に定義しているわけではないが, すべてリスクであるといえる。そこで, ここでは, これらの社会的背景を, 純粋関係のリスク, 経験の隔離のリスク, 様々な出会いや環境のリスク, 社会的排除のリスク, 伝統的権威の喪失のリスク, 商品化のリスクとして捉えたい。
- 28) この点に関しては, 拙稿「リスク社会の社会病理 もうひとつの負け犬の理論」『現代の社会病理』第17号, 日本社会病理学会, 2002年, 77-88頁を参照されたい。
- 29) この点に関しては, 矢幡洋『殺人者の精神科学』春秋社, 2002年, 84-86頁を参照した。
- 30) 同上書, 78頁。
- 31) Giddens, A., *The Transformation of Intimacy*, Polity, 1992, p.58. (訳) 松尾精文, 松川昭子訳『親密性の変容』而立書房, 1995年, 90頁。この他, ギデンズは, 純粋関係を以下の7つの点から定義している。純粋関係とは, 社会的, 経済的生活に錨を降ろしておらず, 自由に浮かんでいる関係である。純粋な関係は, その関係がもたらしてくれるもののために追求される関係であり, これが「純粋」の意味するところである。純粋な関係は, 開かれた方法で, 継続的にまた再帰的に構築されるという内在的特徴を有している。純粋な関係においては, コミットメントが中心的な役割を果たす。純粋な関係は, 長期に渡る安定を達成するための大きな条件である親密性に焦点を当てている。純粋な関係は, パートナー間の相互信頼にかかっている。信頼を築くためには, 人は相手を信じなくてはならないし, 信頼される価値のある人でなくてはならない。「真正性」が自己実現の中で重要な場所を占めるのはこのためである。純粋な関係では, 人は単純に相手を認めるだけでなく, 相手の反応のなかでアイデンティティを確認するわけでもない(Giddens, *op.cit.*, 1991, pp.88-98を参照)。
- 32) 佐々木嬉代三, 前掲書, 234頁。
- 33) 岡山地検は2002年11月6日にこの母を保護責任者遺棄致死の罪で起訴した。2003年4月23日には岡山地裁において保護責任者遺棄致死罪で懲役2年4カ月の判決が言い渡された。

- 34) Giddens, *op.cit.*, 1992, p.98. (訳) 前掲書, 1995年, 148頁。 親の手記」『文藝春秋』2000年12月号, 136-163頁を参照した。
- 35) *Ibid.*, p.98. (訳) 同上書, 149頁。 39) この点に関しては, Giddens, *op.cit.*, 1991, pp.155-160を参照した。
- 36) Giddens, *op.cit.*, 1991, p.186. 40) この点に関しては, Giddens, *ibid.*, p.160を参照した。
- 37) この場合, 市民道徳(近代的な倫理)の衰退, 崩壊とは, 父は権威をもった存在であり, 母は深く自分を愛してくれるという近代家族の一義的な道徳的, 倫理的意味づけが拡散していることを意味する。 41) *Ibid.*, p.185.
- 38) この点に関しては, 「『パスジャック少年』両 42) *Ibid.*, p.185.
- 43) *Ibid.*, p.168.
- 44) この点に関しては, 矢幅洋, 前掲書を参照した。

## The Influence of Existential Anxiety on Youth Crime in a Risk Society: Based on the Evidence of a Bus Hijacking in Saga Prefecture

KONDO Rie \*

Abstract: This manuscript aims to examine the idea that crimes against society committed by young people in recent years are characterized by their existential anxiety related to the risk society. The author refers to the theory of existentialism developed by A. Giddens and uses the example of a youth who hijacked a bus in Saga prefecture in 2000. In addition, I examine factors contributing to existential anxiety such as risk of social exclusion as proposed by P. Bourdieu, the pure relationship in the context of the parent-child relationship, and the sequestration of experience by expanding systems of specialists as proposed by A. Giddens. Recently, existential anxiety, which is an illness of people in modern society, has been receiving attention and has become an issue again in this risk society. This is a new aspect of an old issue. The risk society developed in the 1990s, following the consumer society. In addition, not only selected groups and classes, but also ordinary children and families are at risk, with risk affecting people individually, and moreover, by convergence.

Keywords: risk society, existential anxiety, risk of social exclusion, risk of pure relationship, risk of the sequestration of experience

---

\* Assitant Professor, Okayama Prefectural University